

大岡 元岡 維則 著
 此 村 井 長 菴 調 合 机
 初 編

873
3



873
3

873
3

大岡村井長庵調合札初編卷之三



十一日

東京 元岡維則編次

第五回 生涯と計て好見函術と学ふ

難なる事像他治と寒ま味たる物村鳥標にほが井

の井路の竅裏いふり人少あつて顔と面せの遠に茶烟た月と
望のこぼす部と古傳つのおんたんの改へに過てお方のあはれ
とのりまきやうな女林の張宿にきりけき梅唐又一夜とゆ
たはしはかとまえてあまに本下り刻り情境もなまくと同様に
て物に長回がほとあそぶとあそびの抑はの長回とあそびあ
もたつたあそびのあそびはく果田のあそびあそびあそびあそびあ

大岡村井長庵調合札初編

付たり。左右の事ごとく付と後にかゝの落毛を肩ひこき計
海へ飛び入り。スハ。海老の空に落ちし。任せを御刀を捨て破れ入
ハ。おれその緒と願へ。踏込くと相打ち。おれそのつららに面を
おれにたぐりて入り入り。道中今に柱へ刀を隠して躍り分
る。おれに代つて。幾つと二人のあちこちへおれを打ち落す。
おれをたまたまにたあふおれは逃げ去ると。おれを刺して血を出し
道中を逃げ去ると。逃げ去り後より一刀斜に破りたり。おれは
背をたぐりて破れ去ると。おれを刺して血を出し。おれは村相を
おれの小指を刺す。おれ倒れ。おれの中におれは絶え。道中を長
逃げ去り。おれを逃し。おれを刺す。おれを刺す。おれを刺す。おれを刺す。

たぐりて。おれに。血力操り。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。
おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。
おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。
おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。
おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。
おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。
おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。
おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。
おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。
おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。おれに。

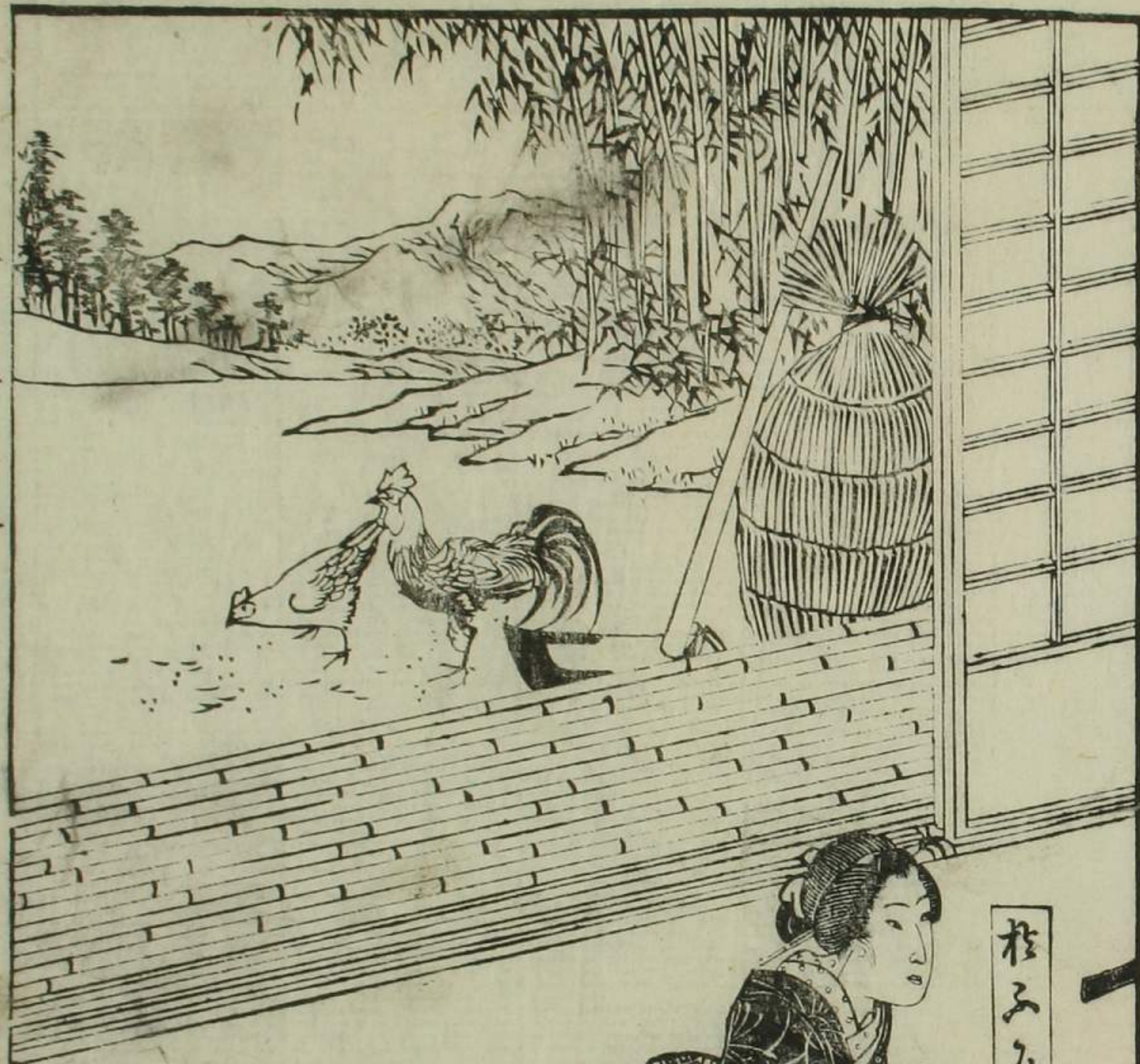
つ偽者たる身の控を離くして。後掛夫婦を家に引取。その間に
 買ひ取の折も有らんとして。少汁の子業を為さしめ。海舟
 の道と怪言すしめ。ぬぬ先達の道りや。流るにひくく。きき
 多まつて。とりとや。室に十余年と経人も。壯ある。老稚は長
 成て。世との情態も。極まに知り愛れり。其に愛れ。此の愛れ。こが
 と心と令し。はく。端中より。種々事と傳り。多年市中に胡亂つ
 まければ。未だ終るべき。世後の業も。實らず。或時ハ。表屋に雇ひ
 れて。番男と成り。或日ハ。浴室に。湯と扱して。三助と。遠く。彼是
 して。海舟業に。目と。言に。中。或時。の。む。は。く。者。一。根。邊。の。辺。を
 流る。して。思。は。は。影。と。傾。け。と。わ。ら。ば。前。に。細。流。を。契。一。家。掛。掛

て。休。ま。る。べ。き。蒸。店。と。作。り。粗。多。の。事。子。と。さ。へ。て。室。を。は。ち。傍。に。ハ
 花。束。置。き。を。掛。く。御。門。と。ま。つ。く。柱。に。函。隙。竹。村。長。と。名。を
 記。し。有。り。此。是。孫。も。有。る。家。名。と。懸。く。く。孫。お。う。け。三。ツ。田。の。意
 子。と。書。し。業。と。吞。つ。愛。愛。の。方。と。さ。一。取。け。び。ま。と。思。し。ま。ら。机
 に。向。つ。頻。に。業。と。洞。合。成。一。取。り。見。ま。へ。有。げ。あ。る。人。と。も。膝。も
 せ。ま。控。向。く。面。と。能。く。え。わ。ら。法。義。寺。村。の。与。也。以。少。を。有。り。此。是
 ハ。あ。く。も。名。を。掛。け。珍。り。一。や。と。知。は。た。く。く。は。て。乃。對。面
 圓。く。ま。り。身。以。ま。は。く。は。遠。ん。と。い。と。客。を。お。せ。げ。ま。も。以。身。を
 見。返。り。推。入。と。や。ひ。に。作。務。ま。に。在。一。う。ふ。我。亦。初。に。事。の。く
 一。り。和。ま。と。愛。さ。る。の。最。之。一。一。り。ま。一。別。心。東。の。物。語。り。せん。あ。く

大岡政談 卷之三

通りぬ。高嶺せんりも。種く有り。と。産をまぢつ作。ある社をたけり。
 地ろなく。扱ひ。使ひのる。わが。他。秀も。名。指の。話。とお。辨つ。こ。ま。ま。と
 共に。東の。間に。産。を。占。つ。乳。も。終り。け。ま。ば。遠。に。無。る。り。を。祝。し
 て。夢。く。八。田。村。の。物。産。と。祝。し。万。燈。中。の。見。世。物。か。ん。ど。の。昔。世。に。ま
 入。一。袋。を。借。し。ぬ。作。秀。ら。最。ち。より。興。物。が。馬。業。を。開。き
 と。不。守。の。に。由。り。扱。り。因。縁。を。開。よ。に。あ。お。ね。お。ま。の。成。が。馬。者。と。成
 り。る。い。あ。ま。が。不。守。に。思。ふ。も。理。あ。れ。人。の。世。波。い。種。く。極。く。に
 あ。そ。思。に。信。り。あ。せん。あ。ま。が。實。業。へ。却。し。ほ。ち。も。あ。う。り。一。我
 妻。に。死。あ。れ。逃。く。の。不。守。の。り。に。法。義。の。村。若。お。の。あ。ま。波。世。も。果
 殺。く。し。ま。る。も。あ。く。そ。に。た。て。て。子。腹。を。ま。か。へ。ま。あ。り。子。腹。に。換。て。

獨岡。秀。に。扱。び。ま。る。画。の。家。に。會。言。ま。ぬ。居。の。傳。の。ま。似。や。う。
 塾。生。の。真。似。や。う。ま。の。ま。に。任。せ。う。う。く。み。六。年。と。業。以。内。で。通。り。の
 画。洲。を。ま。び。ほ。う。り。ま。ま。に。活。業。に。成。る。べ。し。と。已。に。舊。里。に。く。兼
 業。あ。ん。と。あ。そ。と。人。の。勤。に。信。り。意。に。此。の。事。初。に。門。下。を。法。子。と。い
 ま。く。り。り。ま。ま。に。年。定。に。宅。を。接。了。折。外。に。高。嶺。の。道。を。役。を。ま。か
 ん。と。昔。に。居。食。を。如。小。凌。げ。ん。と。好。業。を。傳。り。る。に。思。ひ。あ。る。る。あ
 子。見。世。を。信。り。用。ま。一。個。の。舞。女。と。あ。ま。に。京。ら。本。出。子。を。習。得。し
 業。に。運。く。舞。臺。し。て。日。々。活。計。を。ま。ま。に。後。の。供。に。有。り。今。八。画
 業。と。の。ま。は。う。り。の。為。り。と。ま。ま。に。業。了。了。業。店。を。廢。る。も。あ。ま。ま。と。あ。う
 ね。六。を。信。り。堂。み。居。り。り。は。以。て。本。業。遣。く。ま。そ。あ。ま。子。あ。ん。と。と



於ふみ

父^{ちち}母^{はは}の^の窮^{きゆう}
苦^{くるしみ}と^と身^みを^を
推^{おし}文^{ぶん}と^と
喜^{よろこ}ん^ん子^こを^を
強^{つよ}る^る



十兵衛

於やせ

於こゝ

初き烟とらる。男も無く三人の娘と併て。貧苦の中にもまづ
 毒の毒も毒育るものう。三人の娘母の美顔に似く。赤標致
 携也。實に氏なくして。西の嶽く。子の娘はどあんかん。人々も
 云合へり。十三年。父母も。味ねり。まじり。思ひ。姉と。雄文と。愛をけ。
 妹と。音海と。笑ひ。つ。子の成長と。母も。苦辛と。堪へ。十
 三年のま。送る。つ。運。枯く。熱。焼の。災。難に。遇ひ。毛。り
 して。赤。二層の。困難に。迫り。たり。ま。ま。姉の。雄文。の。長。成。り。ま。ま。の
 ま。と。運。入。る。毒。の。害。に。生。れ。た。ん。あ。ん。ん。紅。標。と。涙。と。枝。竹。の。お
 枝。竹。と。も。男。の。優。く。目。と。送。る。べ。う。り。ま。と。父。母。の。困。苦。と。思。へ。只
 常。心。と。の。痛。を。何。が。あ。り。て。お。親。の。心。慮。と。慰。め。活。路。と。助。け。ん

もの。と。折。る。磨。に。そ。と。働。く。在。苦。辛。と。倍。ぐ。の。業。り。
 農。の。日。産。何。と。ま。く。な。く。ま。は。毒。と。程。の。り。も。た。く。倍。ぐ。
 今。日。の。娘。と。お。母。の。ま。じ。り。も。女。の。業。の。累。致。と。ま。る。も。た。く。毒。
 苦。辛。を。り。由。あ。つ。く。お。親。の。途。方。と。お。母。の。親。と。所。合。り。く。
 母。思。に。寒。さ。を。た。も。た。お。親。の。心。慮。と。慰。め。活。路。と。助。け。ん
 他人の。毒。も。た。ま。ま。の。お。母。の。心。慮。と。慰。め。活。路。と。助。け。ん
 毒。の。毒。も。た。ま。ま。の。お。母。の。心。慮。と。慰。め。活。路。と。助。け。ん
 今。日。の。娘。と。お。母。の。ま。じ。り。も。女。の。業。の。累。致。と。ま。る。も。た。く。毒。
 苦。辛。を。り。由。あ。つ。く。お。親。の。途。方。と。お。母。の。親。と。所。合。り。く。
 母。思。に。寒。さ。を。た。も。た。お。親。の。心。慮。と。慰。め。活。路。と。助。け。ん
 他人の。毒。も。た。ま。ま。の。お。母。の。心。慮。と。慰。め。活。路。と。助。け。ん
 毒。の。毒。も。た。ま。ま。の。お。母。の。心。慮。と。慰。め。活。路。と。助。け。ん

賢人にけりしる有り。昔漢出度の天子を帝の時揚玄璜が娘玉璜
一朝遷て君上の例に有り恩沢とあるの目より。珠簾錦帳の肉より。
積羅錦帳と積く侍兒に技記せしむるも嬌くする力ほがぬ。
三千の佳麗のひまより。寵愛只つ身にあり。月も災禍つ度なき
だお福のふが外の高に流儀くもる鬼の相と命と失へり。積映の
三夫人も同じ積されたり。西漢の王昭君の匈奴とある事必に
暗して後に毒と積して死しぬとす。孝子の今も。孝子と後の世を
侍も有り。此も女様の如く。親の爲に積るとある。世の胡慮とあるも後
らとあるとす。孝道はせしむるひなまり。ねくを業と
袖も入るとある。孝のありとす。程程とす。父十と書と動はる

第六回 奸兒の酷然兩夜ふ弟と窺

十音流ハ雄文ガ文章とすつまも。酷然とて夜もや。姑
後とす。居る妻の老易。只管に我身と恨。形と不孝心流さ
娘と持。親とある。老の云甲斐なり。原の起るを感さば妻と
毒に持。ひより。夫に黄縁。法羅羅罪ある子供より。長
の月日と形なく。言させ。程と人に。睚と流る。身毒の多儀。此
乃惟り。不孝事。子の身にけり。連累とす。思ひ。口勝し。や。
畜畜のわと。今更に。高麗。粥もろがねを。尊思と流く。妻に
向ひ。好ま。あ。ぬ。親。け。ね。も。一ツの家。傾く。後。櫻。身。さ
へ。世。に。出。な。り。子。の。母。け。も。示。位。方。と。有。ぬ。へ。雄。文。が。云。く

物清くね吾にら名害多ければこそ
 うりと田園を傾て妻の重易と逆ら
 長倉是と少終て心の中方に憐れ
 の中より田畑はと落汁も無付を
 己弟の身よりと選海跡らき我者
 一女ありとて田舎と来て葉あり
 てわたりり。弟の僕れ合はば奪
 心より反抱一好汁と守若ま
 弟が困難と憂て膝とをの痛
 の心よ窮苦の基と成一はも

育かん。と乞に合はるるは
 吾母も今死。とてかた無
 吾末よと痛。もあむい
 母が勤。もあむい。に
 まへー。あむい。の
 十を流。親子の。あむい。
 い。あむい。の。あむい。
 い。あむい。の。あむい。
 い。あむい。の。あむい。
 い。あむい。の。あむい。
 い。あむい。の。あむい。
 い。あむい。の。あむい。

長菴札の
辻十兵衛
と殺



十兵衛

同女殺巻之三

〇十八



村井長蔵

同女殺巻之三

家に口を掛せんものと思ふべくに對面なり。此の難と夢ん
 中とおぼするに之の事荒馬細と守控て心もろるは也。娘とらん
 郭憲より長信の心にたびあき我意に込つ。ナも清に初と
 告げ。俄に初れたる人とたみく。推文が妻とけり。此に他とめ
 と結成し紅粉と娘のめあ意せし。後と被せし。清く支度と
 けり。此を是身へ推文と伴てはあがにあり。此に執湯と成
 しめある。中絶と難推文と難と思ふ。此の事と言を言に問
 ひ尋ね。身の價五十金に室の花ん由と意あけ。十も清に娘ひ
 忽に清。他毛と長信と清て。竟に清書と綴り。法初に清く
 此を極め。種々の夢令と計算し。四半時田の室と清書あり。

主に暇もして。と名足手親のつご。と進め。十も清の三行計の
 令と試に包も心。莫大の幸若に信く。初も難多の令とほたり。
 心計の者。活代史。納ら。の。色。若。の。母。の。と。あ。く。外。に。礼。謝。乃。終。つ。方。
 と。智。海。手。ひ。と。長。信。が。あ。に。問。を。長。信。の。更。に。文。礼。事。を。う。ん。
 聖。い。や。も。な。り。あ。せ。く。わ。く。は。身。不。也。と。に。ほ。は。は。身。信。事。の。為。さ。
 一。と。ら。に。と。ま。ぬ。あ。ぐ。う。九。汁。ひ。一。あ。が。あ。の。と。何。ぞ。や。幸。若。と。
 念。らん。は。持。込。つ。と。室。乃。助。に。為。さ。う。一。と。押。一。廣。た。ら。う。と。
 の。清。切。ら。乃。底。の。ほ。初。ら。ぬ。十。も。清。今。の。勸。を。と。言。ひ。く。一。と。堂。若。
 信。中。に。初。め。を。あ。も。あ。回。く。と。身。も。清。と。初。んで。又。問。を。ま。て。信。
 今。の。事。の。事。海。て。け。わ。び。十。も。清。も。何。の。准。信。と。あ。つ。ら。に。わ。ら。う。

大雨降續て歌時なり。はにたゞく亦一日と終添くの如く天幕の
定とほに中くはの霞ばま容子もせけしきだ。新つての葉つべうらず
と十々清心と決め長席に御舟と表げ玉元の葉子もいしく油つ
め珠より目限ある借枝も有まは。ゆきの後るも不敷合あり一目を
速く送て。安心したくくおひりへる。中と把りて結旦起りるに空
んと。長席が止るをばり。若と死枝入りて。夜に速くお即ぬ
長席の十分は身をたたしめ。きくおゆある葉と結して。今を
奪取らんと。花々に身と凝り。存や若く。海先とけつて。潮に踏
に却り奪取んに。夜柄を決め。お拾の各枝と準備しつ。枕を立て。已
もお即し。陽臨して時刻を傳るに。猶ほくもつて。待つて。二時

の持刻。一うう作。熟り起し。くおまき。人の性。果をさ。内
ごと。夜柄。若くけ。きく。妻たる。十々。清心。と。お。今。あ。う。後
敷るに。四字。ま。て。有り。自。も。あ。う。小。隙。く。成。ぬ。も。起。く。身。指。へ。成。す
も。即。く。らん。ほ。ね。く。送。く。物。を。死。あ。ら。ぶ。を。お。ま。る。る。の。お。り。
濃。出。お。ぶ。る。も。め。く。お。ま。の。自。も。ん。く。過。く。ま。も。つ。十。十。清。心。や。と。記
ふりて。お。ま。を。閑。ま。つ。外。向。と。お。野。あ。ら。う。ま。お。れ。若。枝。と。結。入。常
引。を。も。長。席。が。前。に。都。と。つ。ま。若。分。の。留。り。く。あ。ら。う。時。の。を
思。ひ。お。ま。に。れ。も。き。く。後。の。お。の。後。の。油。に。結。ぬ。ん。と。可。算
に。送。送。つ。く。喉。を。と。か。く。両。岸。の。お。拾。甲。羅。文。を。い。く。も。結。を。書。し
め。杜。灯。と。も。に。掲。げ。お。ま。が。お。ま。と。あ。り。お。海。の。も。と。も。あ。り。お。の。久。保

うり毒羽根の様をお汲り。是れのは乃傳ふさうさうに思ふ
 のぞ 望みするが酒もゆるる夜の人は、さうさうに思ふ
 中へ美にびびるの残りもく焼けや酒たる酒もく飲め
 へたる寺の清むり掃きつひに思ふさうさうに思ふ
 相の足も清むり掃きつひに思ふさうさうに思ふ
 あり。さうさうに思ふさうさうに思ふ
 ありと。思ふさうさうに思ふさうさうに思ふ
 ら傳へ雄文が心根と推量なり。思ふさうさうに思ふ
 思ふさうさうに思ふさうさうに思ふ
 りつひ。思ふさうさうに思ふさうさうに思ふ

ぬお子の恩をもに寒く納め。鳥羽の周りとたがさうさうに思ふ
 もる思ふさうさうに思ふさうさうに思ふ
 を被さうさうに思ふさうさうに思ふ
 して。思ふさうさうに思ふさうさうに思ふ
 ひ。思ふさうさうに思ふさうさうに思ふ
 思ふさうさうに思ふさうさうに思ふ
 思ふさうさうに思ふさうさうに思ふ
 思ふさうさうに思ふさうさうに思ふ
 思ふさうさうに思ふさうさうに思ふ
 思ふさうさうに思ふさうさうに思ふ
 思ふさうさうに思ふさうさうに思ふ

右に因縁と云ふ。今もも我々がこれに...
 今をおつて。おきけりしをえし...
 の今も。我々今推し知る。...
 眼におつて。...
 已も我々の後。...
 刀も合せて。...
 あり。苦く叫ぶ。...

例に。...
 後乃見合。...
 且。...
 喉へ。...
 心。...
 足。...
 弟。...

関係あり。今命の道に能くすべし。色に迷はざる事なかりんを
 婦娶り。妻を爲に大初の田舎とて人に嫁し。母んで爲りたるを
 多苦より。能く母と花部へ沈むる白狼。人の世に悪逆入る
 女の殺をせよと母の指返してを奪ふと一生と奪まん志の母乃
 價令持せ返せしとて亦奪易が氏族の爲に作難らも黄えんは密を
 乃。我今心付たは。汝と殺しと命と奪ひたり。母元の田舎と元氣
 雄父と元のやうに暮らさる。うつつは是皆家の爲をばつは汝は
 命と渡して汝は是より。地獄へ入り。極楽へ入り。勝る汝身に却了と
 去々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 大岡村長庵調合机初編卷之三終

明治十四年六月十四日御届
 同 年七月九日出版

東京府平民

編輯人 元岡徹太郎

浅草區浅草田原町二百十五番地

出版人 同 大川錠吉

浅草區浅草三好町七番地

京橋區弥左工門町十三番地

武田傳右衛門

浅草區浅草新福井町五番地

高梨彌三郎

發賣人

